ソニックに転生したけど原作知識がない件

赤バンブル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北米で大人気の青いハリネズミに転生してしまった主人公が、原作知識抜きで何とかしようとする物語。

「ノープロブレム！冒険を始めるぜ!!」

注意…あらすじは飽くまでフィクションです。

目次

人物まとめ（ソニック・ザ・ヘッジホッグ編）―――― 1
まずは自己紹介―――― 5
レイとマイティー―――― 8
奇跡の石と髭卵―――― 17
旅立ちの決意―――― 27
ＥＧＧＭＡＮ―――― 44
ＭＡＲＢＬＥ　ＺＯＮＥ―――― 51
ラビリンス溺死事件？―――― 58

人物まとめ（ソニック・ザ・ヘッジホッグ編）

ソニック・ザ・ヘッジホッグ

ご存知今年になって実写映画デビューを果たした音速の青いハリネズミに転生した主人公。マリオやカービィなどの任天堂キャラに関しては知識はあるもののソニックシリーズに関しては何も知らないため、原作知識皆無。金丸ソニックとは違い英語はほとんど喋らず、イメージ的にはＯＶＡ版に近い。

幼い時から育ててくれたロングクローに対して顔には見せていないが実の親同然に思っており、彼女が倒れた際はかなり動揺している。

６つ揃えるとどんな願いでも叶えてくれると言われている島に伝わる奇跡の石「カオスエメラルド」を手に入れるため、そして、世界征服を企むＤｒ．エッグマンの野望を阻止するために故郷の島の冒険を始める。

レイ・ザ・フライングスクイレル

ムササビの少年でソニックの友人。デビュー作「セガソニック・ザ・ヘッジホッグ」以降出番に恵まれず、「ソニックマニア」で２５年ぶりの復活を果たした。本作では、幼少

期の頃からソニックと知り合っており、居候先のファーストフード店の手伝いをしている。一人称は僕。

マイティー・ザ・アルマジロ

アルマジロの少年でソニックとレイとは一つ年上だがどこか抜けている。二人と共に「セガソニック・ザ・ヘッジホッグ」でデビューし、「カオティクス」「ソニックマニア」に出演。三人の中では屈指のパワーファイターである一方、マイペースが災いして無人島でサバイバルをする羽目に会うなど結構大変な目に遭っている。本人曰く、レイと自分の両親は幼少期に亡くなっているとのこと。

ロングクロー

ソニックの育ての親であるフクロウの女性で「ソニック・ザ・ムービー」で登場するキャラ。生意気な一面を持つソニックに手を焼いているが実の息子のように愛情をもって接している。ソニックが１５歳の時に病気で倒れてしまう。

Ｄｒ．エッグマン

ご存知の悪の天才科学者。原作同様にカオスエメラルドを目当てにサウスアイラン

ドを訪れ、要塞へと改造している。

サウスアイランドの住民たち

メガドライブ時代のソニックシリーズには、エッグマン以外の人間キャラは一切登場していないが本作ではサウスアイランドの一部の港の集落に住んでいるという設定にしている。この設定はソニックの好物であるチリドッグをどうやって入手しているのかについて疑問に感じていたため、加えたもの（また、島で靴や手袋をしている者がソニック以外にいないのは流石に違和感があるためでもある）。

市場の人たち

ソニックが生活必要品や食料を買い足しに行く際に行く店の人たち。

ファーストフード店のおっさん

ソニックの食べるチリドッグを販売しているファーストフード店の店主でレイの居候先。痔で出番がない。

船乗りのじいさん

ソニックが配達のバイトで運んでいる船を運んだりしている船の船長。ソニック曰く、「ほうれん草を食べたポパイみたな筋肉ムキムキマッチョのじいさん」。ノリがよく、無理そうな難題でも高い報酬や好物を餌にソニックをうまく使うなど得体が知れない。

診療所の先生

港で診療所を開いている医者。

まずは自己紹介

よおっ！

俺はソニック。ソニック・ザ・ヘッジホッグ！

アメリカであのマ〇オとタイマン張れるぐらい人気になったあの音速の青いハリネズミとは俺のことだぜ！

っと、ここまで自己紹介をして言うのもなんだけど実は俺には二つの記憶があるんだ。

一つは、今の俺の記憶。

そして、もう一つは前世の記憶だ。

よく、あるだろ？異世界転生って奴さ！

でも、いくら思い出そうとしても死因が詳しく思い出せないんだよな。

ほら、ああいうのってトラックに撥ねられたとか、通り魔に刺されたとか、病死したとかっていうのが大半だろ？

憶えている限り、前世の俺って健康体でどこにでもいそうだった日本人だったんだぜ？まあ、一人生活するようになってからは面倒くさがって毎日カップ麺とマックだった

けど。だから、神様や仏様に会った記憶もない。
物心がつくまで変な夢だと勘違いしてたんだけど最近になって前世の記憶だって理解したんだよね。

「ソニック！一人で何騒いでいるの!?」
「騒いでないよ！」
とは言ってもまだ、５歳の子供なんだけどな。要はクレ○んの○んちゃんと同じ年。
ちなみにさっきの声の人はフクロウのロングクロー。俺の育ての母さんなんだ。捨てられていた赤ん坊の俺を実の子供のように育ててくれたんだぜ？時々、家に忍び込んで来たネズミを食べちまうんだけどな。
話は取り合えず一通りしたと思うけど、俺は転生と言うよりは憑依に近いと思うんだよね。えっ？なんで近いってつけるかだって？
だって、ソニックのゲームやったことないんだもん（問題発言）。
そりゃ、マ○オとオリンピックゲームやってスマブラに出て、映画になったのは知ってるぜ。でも、それ以上のことは詳しく知らないんだ。ぶっちゃけ、昔はマ○オと同じ横スクロールアクションゲームだったってことぐらいしか聞いたことない。
だから、これから先、俺になにが起こるのか、どんな目に遭ってしまうのか、そこが

いまいち不安でしょうがない。だって、マ○オや○ービィだって、作品ごとに事件に巻き込まれるんだぜ？ソニックだって結構シリーズあったはずだから何かに巻き込まれるに決まっている。まだ、子供だから心配ないと思うけど果たして・・・・

「ソニック、港まで買いに行ってきてちょうだい。」

「は～い～！」

俺は、靴を履くと玄関の方へと歩いて行く。玄関ではロングクローが財布と買い物袋を持って待ち構えている。両手羽なのに器用に持つなって毎度思うよ。

「買うものはこの紙に書いてあるからね。」

「うん。」

俺は買い物袋と財布を受け取ると玄関を開ける。

「チリドッグの分は？」

「一緒に入ってますよ。途中で道草しちゃダメだからね。」

ロングクローに言われると俺は、買い物をするべく港へと走って行った。

レイとマイティー

家から出た俺は、早速少し離れたところにある港の市場までひとっ走りする。結構広い島だけど、人が住んでいる場所は限られているから港から離れて暮らしているのは大抵変わり者が大半だ。ちなみにロングクローもこの変わり者の仲間だと俺は勝手に解釈している。

元々、このサウスアイランドは変わった島だから島民はそこまで多くないんだ。いつからなのか俺は詳しく知らないけどこの島、常に移動をしているからあまり移民地や貿易拠点としてあまりいい所ではなかったからしい。一時はその珍しさに空港を作ろうとかって言うどっかの国のお偉いさんが島の土地の一部を買収しようとしたけど島民に猛反対されて中止になったとかっていう話も聞いたことがある。

まっ、島の大半が自然のままで特に何もないけど結構いい所だぜ！

俺は、港に着くと買い物かごのメモを頼りに買い物を始める。

「おばちゃん、これとこれちょうだい。」

「あいよ！」

野菜の置いてある店（前世の言葉で言えば八百屋と言えばいいかもしれないけどなん

か違う）で俺は早速メモに書いてある品を店主のおばちゃんに頼む。世界観よくわかんないけどこの島の人間って喋る動物に対して抵抗ないのかな？

「はいよ。オマケにパパイヤとマンゴーのどっちかつけるけどどっちがいい？」

「マンゴー。」

「ソニックは感がいい子だね。今日のマンゴーはよく熟れているから甘いよ。」

まだ、子供だからって言うのもあるけどこの島の人間は結構俺に優しい。

「おう、ソニック！丁度、今朝新鮮な奴が上がったんだ！買ってくか？」

「ソニック、今日もロングクローのお使いか？」

「ソニック。」

「ソニック。」

俺はロングクローのメモリストに書かれた品を一通り買うとお目当てのファーストフードの屋台に行く。

「おっちゃん、いつもの一つ！」

俺は店の目の前で買い物袋を一回起き、顔を上げてチリドックを頼もうとする。

「あれ？」

でも、屋台の中にいたのはいつものおっちゃんではなくエプロンを付けた黄色い体色に先端が丸い尻尾を持つサル・・・・じゃなくてムササビがいた。

「あっ、ソニック。いらっしゃい！」
　おっと、紹介しなくちゃな！コイツはレイ。レイ・ザ・フライングスクイレル。俺のダチの一人でこの屋台のおっちゃんの所で世話になっている。言っとくけど頭のピンと撥ねている毛は妖怪アンテナじゃなくてただのくせ毛だからな。
「なんで今日はレイが店番なんだ？おっちゃんは？」
「あぁ。痔だよ、痔。新作の製作中に激辛なものばかりとっていたから悪化したんだ。今日は先生の所へ行って治療に専念だよ。僕は、午前中の店番で午後は閉めていいだってさ。」
　レイは、そう言いながら慣れた手つきでチリドッグを作る。
「そう言えばこの間のタコスもタバスコの入れすぎで火吹いていたな。」
「そうなんだよ、何考えているのやら。」
　俺は、レイからチリドッグを受け取ると早速頬張る。このチリソース、多分今朝仕込んだものだな。うまい。
「おっちゃん譲りのうまくなったんじゃないのか？」
「このぐらいうまくならなきゃ大将の代わりできないからね。」
「そうか？」
　俺はあっという間にチリドッグを平らげるとレイと午後の遊びの打ち合わせをして、

家へと帰って行った。
「ただいま!」
　俺は、買い物袋を置いて部屋に戻ろうとしたらロングクローに捕まった。
「待ちなさい、ソニック。」
「何?」
「ちょっと靴を見せなさい。」
　ロングクローに言われて俺は自分の靴を見せた。靴を見せるなり、ロングクローは目を細くする。
「この間新しい物にしたばかりなのにもうこんなにすり減ってるのね。」
「俺のせいじゃないよ。すぐにすり減っちゃう靴が悪いんだもん。」
　俺の靴はすぐにダメになる。速く走っているとどんどん靴底がすり減っちゃって一週間もしたら穴が開いてしまう。ロングクローは、俺の靴のことでどうすれば長持ちするのかで良く頭を抱えていた。
「しょうがないわね・・・今度新しいもの用意するからそれまでこっちで我慢しなさい。」
「え〜!!」
　ロングクローから渡されたのは前のダメになった靴を補修したものだった。穴が開いてしまった靴底に新しいものを付け直してとりあえず応急処置したものなんだけど

これだとフルスピードで走った時、靴底がはがれちゃうことがあるからあまり履きたくない。
「我慢しなさい。」
「ブウ～！」
俺はふくれっ面になりながらロングクローから靴を受け取る。

午後になり、昼食を終えると俺は釣り竿とバケツを持ってレイとの待ち合わせの場所へと向かう。幸い場所は家から遠く離れていなかったから普通に歩いて行くことができた。目的地についてしばらく待っていると膜を広げながら飛行するレイの姿は見えた。

「おまちどお。」

合流した俺たちはそのまま歩いてグリーンヒルの方へと歩いて行く。グリーンヒルは綺麗な草原地帯で海を見渡せる絶景スポットだ。俺たちが海辺の方まで来るといつもの如く、アイツが釣りをしながら寝ていた。

「お～い！マイティ――！」

「ん？」

俺たちが声をかけると彼は目をこすりながら上半身を起こす。コイツはマイティ――・ザ・アルマジロ。俺たちより一つ年上で普段は大人しい奴なんだけど、怒らせるとかなり怖い。この間、悪戯でコーヒーにデスソースを仕込んで飲ませて岩を持ち上げて追いかけまわされたのは今でも新鮮に憶えている。

「ん・・・・ソニックとレイか。」
「今日は、三人で釣りをするって約束してたじゃないか。」
「そうだっけ?」
「「言った。」」
　俺たちはそのまま釣りを始める。
「そっか。あのおっちゃん、また痔になったのか。」
「もういっその事店畳んで、別の商売した方がいいかも。」
「それは困るぜ!あの店以外でチリドッグ売っていないからよ!」
　そう言いながら釣れたら自慢し、逃げられたら悔しがるを繰り返す。

　やがて日が沈み、俺たちは釣れた魚をバケツに抱えながら帰路につく。
「ねえ、二人は大きくなったら何になる?」
　帰りの間際、レイは気になったかのように俺とマイティーに聞いてきた。
「どうしたんだよ、レイ。急に。」
「僕たち・・・・まだ、子供だからいつもこうやって遊んでいるけど。大人になったら、この島から出るかもしれないでしょ。その時、二人はどうしたいと思う?」

レイは不安そうな顔で言う。俺たち二人は困った顔で考えるがマイティーの方は少し考えた後、落ち着いた口調で答えた。
「俺は、島の外に出てみようと思う。」
「えっ!?」
「だって、俺たちこの島以外のこと知らないじゃん。だったらさ、島の外に出て旅をしてみるって言うのもいい話じゃないのか?」
マイティーは呑気そうに言うが俺は島の外に出るという考え自体持ったことがなかったからその答えには驚いた。
「ソニックはどうしたいんだよ?」
「俺?」
「俺とレイの両親は漁の最中、嵐に巻き込まれて死んじまったからもういないけど、ソニックの両親は何処にいるかわからないんだろ?だったら、島から出て探してみるのもいいんじゃないか?」
「・・・・でも、俺にはロングクローがいるからいいよ。」
「そっか?」
「あっ!飛行機だ!」
レイは、夕焼け空を飛んでいるプロペラ機を見て指を差す。

「おっ！一体どこから飛んできたんだろうな。」
「この島の外からかな。」
俺たち三人はその飛行機を見送りながら同じことを考えた。
この島の外にはいったいどんな世界が待っているのだろうかと。

奇跡の石と髭卵

１０ｙｅａｒｓ　ｌａｔｅｒ・・・・

気が付けば俺は１５歳になっていた。

靴底がすぐにすり減ってロングクローを困らせるのは相変わらずだけど、流石に成長したのか最近は靴代は自分で出すようにしたり、すり減ったところを自分で補強したりと工夫するようにしている。

でも、流石にサイズもデカくなったから当然ロングクローからもらう小遣いじゃ足りなくなる。靴代を出すようになってからは毎日食いに行っていたチリドッグも週に３回ぐらいに減ってしまった。だから、ここ最近俺は軽いバイトをするようになった。

「・・・・・・・」

午前４時半に起床。

ベッドから起きた俺は物音を立てないように準備し、港の方へと行く。港の方へ行くとちょうど船から積み荷が降ろされているところだった。

「よっ、じいさん。今日も稼ぎに来させてもらったぜ。」

俺は、積み荷の検査をしている船長のじいさんに声をかける。このじいさん、島と他の様々な場所を行き来しているベテランの船乗りでとても高齢とは思えないほど筋肉モリモリマッチョマンでポパイじゃねえかと疑いたくなるある意味謎の超人だ。こんな変態染みた格好のじいさんだけど丁度小遣いに困っていた俺に目を付けて給料を出す代わりに届いた荷物を宛先まで配達する仕事を任せてくれたいい人なんだぜ。

「おう、ソニック！相変わらず青いな！」

じいさんは、笑いながら俺に今日の配達リストを手渡す。とは言ってもそんなに遠くへ行くわけじゃないからリストを見れば大体の届け先は理解できる。まっ、要は牛乳や新聞配達のような感じさ。

「じゃあ、早速始めるぜ。」

「頼むぜ、何しろ今日はブレックファーストを取ったらすぐに出港だから、最終確認をしなくちゃならないんだからな。」

「えっ!?朝食の後すぐって・・・・後５０分しかねえじゃねか!?」

俺は腕時計を見ながら愕然とする。いくら小さい港とはいえこの積み荷の荷物を全部配達するには最低でも1時間以上はかかる。

「ハッハッハッハッ！この仕事はスピードが命なのよ！」

「いや、いくらなんでも無理なのは無理だぜ!!」

「なあに、間に合ったらいつもより報酬増やしてやるから！」
「だから、こんなに・・・・・」
「できたら、チリドッグ１０個分の代金も追加しちゃおうかな？」
「ちくしょう！やってやるぜ!!」
チリドッグに釣られ、俺は急いで積み荷の配達を始める。
このじいさん、人を使うのがうまいぜ。

午前6時半。

「あぁ、全く人使いが荒いのかうまいのか・・・・・」

配達をなんとか時間内に終えた俺は、じいさんから報酬をもらうとレイのファーストフード店で朝食兼ねの軽い休息を取りに来ていた。店主のおっちゃんは、ここ数年前に息子さん夫婦の開いている料理店が危ないという話を聞いて出かけちまったきり、帰って来ていないんだってさ（手紙は定期的に送って来るんだけどそれでもまだ戻れないらしい）。

以降はレイが代わりに切り盛りをしていて島のみんなからはぶっちゃけ「レイの店」と言う認識になっている。おっちゃんの技術をみんなものにしていることもあって店は特に経営が傾くということもなく繁盛していて、毎日朝早く開いてくれるから早朝から働く俺にとってはありがたい存在だ。

「それにしてもソニックもソニックでよくあんな短時間で運べるよね。あの船長さんもこの間来たとき笑いながら褒めてたよ。」

レイは、そう言うと注文した品を持って来た。まだ、朝早いということもあって仕込みを終えた後は特に仕事がなくなるからこんな風に話せる時間がある。
「仕方ねえだろ。俺だって金が欲しいんだからさ。靴底がすぐにすり減っちまうから新しいの買うので金が回らないんだ。」
「ハッハッハッハッ・・・・足の速いソニックには泳げないこと以外で唯一の弱点だからね。」
レイは笑いながら言うと注文していない新作バーガーまで俺の前に出してくれた。
「ん？俺、こっちは頼んでいないけど。」
「僕の驕りだよ。配達した荷物の中には僕が発注した材料まであるからね。」
「サンキュー、レイ！」
俺は早速新作バーガーを頬張る。
「そう言えばソニック、こんな噂話聞いたことがある？」
朝食も兼ねて一緒に食べているレイはひょんなことから俺に奇妙な話をし始める。
「噂？何のだよ。」
「この島の伝説だよ。」
「伝説？」
「このサウスアイランドには、実は大昔の文明が残した宝石や遺跡の宝庫であって、その

中に全ての生物にエネルギーを与えるだけじゃなくて、６つ全部集めるとどんな願いでも叶える奇跡の宝石があるって。」
「どんな願いでも叶う？流石にそれは嘘じゃねえのか？」
俺は、嘘くさい伝承を聞きながら食事を続ける。ド○ゴンボールやアラジンの魔法のランプじゃないんだからよ。
「そうかな・・・・・」
レイは、少し残念そうに言う。
食事を終えた俺は、そのまま急ぎ足で家に帰る。玄関に入るとちょうどロングクローが部屋から出てきたところだった。
「あら、ソニック・・・・・今帰ってきたの？」
ロングクローは、少し赤い顔で俺を見る。
「あぁ、ちょっとね。」
「もう、大きくなったんだから心配ないと思うけどあまり夜遊びとかしちゃダメよ・・・・コンコン！」
ロングクローは咳き込みながら言う。ここ最近ずっとこんな感じな気がするな。
「大丈夫かよ、ここ最近ずっと咳き込んでいないか？」
「そうかしらね？コンコン！」

少し額に手を触れると熱っぽい。
「風邪でも引いたんじゃないのか?」
俺は、心配して彼女を部屋に戻そうとする。
「朝飯まだなんだろ?なんか適当に作って風邪薬と一緒に持って行くから休んでろって。」
ロングクローはそう俺に言われると自分の部屋に戻って行った。俺はしょうがねえなと思いながら台所に行き、冷蔵庫の中身を確認する。
「えっと・・・・・流石に昨日の残りもんじゃまずいからな。とりあえず、野菜を細かく刻んで合わせた御粥の方がいいかな?」
俺は、早速料理を始める。料理ははっきり言ってうまい方じゃないけどロングクローの手伝いを何度もやらされていることもあるからそこそこは出来る。
そう言えば原作のソニックって料理できたんだろうか?
「風邪薬は・・・・・ヤバッ、切らしてる。買い足しに行かないとな。」
風邪薬が切れていたため、俺はとりあえずできたお粥を器に盛り、部屋の前まで持って行く。
「ロングクロー、風邪薬切れてなかったからとりあえず朝飯だけ持ってきたぜ。」
「ありがとう・・・ちょっと待って。」

少し経った後、彼女は部屋のドアを開けて中に入れてくれた。彼女の机の上には何か作業をしていたのか小道具が置いてあったが作ったものが置いてなかった。散らかしたままって言うのはロングクローらしくないけど。

「俺、また港に行って薬買ってくるから。」

「ごめんなさいね・・・本当にここ最近調子があまり良くなくて・・・コン、コン!!」

咳き込むロングクローのことを気にしながらも俺は、薬の買い足しに出かける。

「ん?」

行く途中、俺は聞き覚えの無い機械音を耳にした。

この辺は確か手付かずの土地のはずだから工事とかしないはずだ。なのになんでこ

んな工事現場に様な音がするんだ。
俺は、道を外れてグリーンヒルの方へと向かってみる。
「わあっ!?何なんだこりゃ!?」
俺が目にしたのは普段は小鳥や小動物たちがその辺でのんびりしているはずのグリーンヒルが何かによって堀荒らされた痕だった。
「なんだよこれ!?誰がこんなことを・・・・・・」

『ホ～ホッホッホッホッ～!!』

少し離れたところから誰かの高笑いする声が聞こえる。俺は速足で声のした方へと走って行くとそこには奇妙な円盤のような乗り物に乗った卵みたいな体型をした髭を蓄えた男がいた。
「ついに手に入れたぞ!組み込めばあらゆる兵器に超パワーを与える奇跡の宝石『カオスエメラルド』!!後、４つ集めればワシの夢見た理想郷、『エッグマンランド』の建設の日はすぐ間近じゃ!!」
男の手には綺麗な色の宝石が握られていた。まさか、アレを手に入れるためだけにこんなことをしやがったのか?あの髭卵、許せねえ!!

「おい、そこの髭卵!!」
「ん?」
　俺の声を聞いて髭卵（仮）は、眉間に皺を寄せて振り向く。
「なんじゃ、貴様!?それにワシのことを髭卵とはなんという言い方じゃ!」
「綺麗なグリーンヒルをこんなにメチャクチャにしやがって。宝石泥棒するなら他所でやれよ!!」
　俺は体を丸めながら勢い良くジャンプをして体当たりを仕掛ける。
「うおっ!?このハリネズミめ!このワシに喧嘩を売るとは!」
「勝手に人の家の近くを荒らしたのはお前だろ!この髭卵!!」
「誰が髭卵じゃ!?ＩＱ３００!この世に並ぶ者はいない天才科学者Ｄｒ．エッグマン様じゃ!」
　エッグマンと名乗った髭卵（仮）は円盤の中からチェーン付きの巨大な鉄球を出す。
「この悪の天才科学者が自ら相手をしてやるからサービスとして名前を聞いてやろう。貴様、名は?」
「ソニック!ソニック・ザ・ヘッジホッグだ!!」
「ソニックか・・・・・・フッフッフ、ソニックよ。ワシに喧嘩を撃ったことを後悔させてやるぞ!ホーホッホッホッホッホッ!!」

旅立ちの決意

「これでも喰らえい！」
　エッグマンは俺に向かって鉄球をてこの原理で振り下ろしながら向かってくる。
「そんなもんに当たるもんかよ！」
　俺は、ジャンプで避けるとまた奴の円盤に体当たりを仕掛けてやった。
「うおっ!?やってくれおったな!!」
　エッグマンは、反転して鉄球をもう一回振り下ろす。着地した直後のこともあって俺は背後から打ちつけられそのまま岩に激突する。
「フゲッ!?」
「ホ～ホッホッホッホッホッ！次でとどめじゃ!!」
　エッグマンは、まだふらついている俺を見て笑いながら追撃を仕掛けようとする。
（やべ・・・・・・フラフラしてまだ思うように動かない・・・・・）
　俺がフラフラ動いている間にもエッグマンの次の攻撃が迫る。
「お別れじゃ、ソニック！精々ワシを敵に回したことを後悔するんじゃな！」
　エッグマンの鉄球が俺に向かって飛んでくる。

ガンッ!!

だが、鉄球は折れに届くことはなかった。

俺は何事かと自分の目の前をよく見ると見覚えのある後姿が見えた。赤い甲羅・・・・でも亀ではない。

「マ、マイティー・・・・・・?」

目の前にいたのはマイティーだった。騒がしい音を聞いて駆けつけてくれたのだろう。マイティーは俺に命中しそうになっていた鉄球を両腕でガッチリとキャッチしていた。

「おい、ソニック!大丈夫かっ!?」

マイティーは、俺を見ながら声をかける。一方のエッグマンがマイティーの介入に驚いていたようだった。

「な、なんじゃお前は!?」

「俺のダチに何てことしてくれやがったんだ!この卵ヘッド!!」

マイティーは、力いっぱい鉄球を引っ張り上げる。するとチェーンで繋がれていたエッグマンの乗り物は勢いよく振り回される。

「わぁあああああ〜〜〜〜〜!?」

マイティーが回ることによってエッグマンは目が回る。

「や、やめぇ〜い!やめんか!?」

「喰らえ!!」

マイティーは遠心力がついたのを見計らって鉄球を離す。するとそのままエッグマンは俺と同じように岩に激突し顔がめり込んだ。
「あだぁ・・・」
「ソニック、しっかりしろ。」
「た、助かったぜマイティー。」
マイティーが膝を付いている俺の安否を確認している一方エッグマンはそのまま力なく乗り物事落ち、持っていた宝石を落とした。宝石は、俺たちのところまで転がり、俺の傍で止まった。
「ん?･これがカオス何とか?」
「フブブ・・・・・・あっ!?しまった!?」
エッグマンは自分の手からカオスエメラルドが離れていることに気が付き、驚いた顔で俺たちの方を見る。
「おのれ!･ワシのカオスエメラルドを!!」
エッグマンは、乗り物に乗って俺たちの襲い掛かろうとする。だが、乗り物は動くものの煙を吹かしながらフラフラして武器が飛んでくる気配はなかった。
「あらっ!?もしかして、さっきの衝撃でエッグモービルが故障しちゃった!?」
動揺しながらエッグマンは俺たちの様子を窺う。俺は腕を振り回しながら、マイ

ティーは指を鳴らしながらエッグマンを睨み返す。奴は思わず冷や汗をかいた。
「く、くそ～!!憶えておれ!!今回はワシの負けにしておいてやる!!だが、カオスエメラルドは必ず返してもらうぞ!それまでは・・・・・さらばじゃ!!」
エッグマンは、エッグモービルを動かしながらその場を後に島の一番高い山の方へと飛んで行ってしまった。
「なんなんだ、アイツ?」
マイティーは、飛び去って行く奴の姿を見ながら言う。
「さあ、俺にもなんだかさっぱりだ。でも、グリーンヒルをこんなに荒らすほどこんな石ころがほしかったのかね?」
俺は、奴が置いて行ったエメラルドを見ながら言う。
確か後4つとか言ってたよな?
そんなにすごい宝石には見えないんだけどな。
「・・・・・あっ、そう言えばマイティー。お前、確か旅に出ていたはずじゃなかったのか?」
俺は、思い出したかのようにマイティーに聞く。憶えている限り、マイティーは1年前に旅に出たはずだ。手紙も碌によこさないものだからてっきりまだ帰ってこないと考えていたんだが。

「いやぁ・・・本当はもっと早く帰って来るつもりだったんだけど乗ってたヨットが嵐で流されてつい2，3か月無人島でサバイバルする羽目になったんだ。数日前、通りかかった船に乗せてもらってやっと帰ってこれたんだよ。」

なんとなく納得できるようで納得できないようなことだったがマイティーらしい答えだ。多分、嵐に備えずに昼寝してたせいで流されたんだろうな。むしろ、溺死しなかっただけすげえし。

「まあ、俺の武勇伝は後で語るとしてソニック、お前なんであんな奴に駆ら周れたんだ？」

「薬を買いに行く途中ものすごい音がしてたから・・・いけねっ!?風邪薬を買いに行く途中だった!!」

俺は、肝心なことを思い出して急いで走り去っていく。

「お、おい、ソニック・・・・・」

マイティーは、走り去っていった俺をしばらく呆然と見ていた。

数十分後、薬を買って帰りを急いでいると道端で待っていたマイティーと合流する。
「なんだ、ロングクローが風邪を引いたから態々薬を買いに行っていたのかよ。」
「あぁ、最近よく咳き込んでいたからな。」
俺たちは、久しぶりの再会と言うこともあってさり気ない会話をしながら家まで歩いて行った。
「そうだ、せっかくここまで来たんだからお茶でも飲んでけよ。」

「いいのか？って言うかお前がお茶を淹れる姿なんて想像できねえけど。」
「大丈夫だって。こう見えてもロングクローのお気に入りの紅茶、何度か拝借したことがあるからさ。」
　そう言いながら俺は玄関を開けるがドアの先の光景を見た瞬間、絶句する。
「ろ、ロングクロー？」
　ドアの先には部屋で寝ているはずのロングクローの倒れた姿があった。近くに割れた器があるのを見るとどうやら片付けようとして倒れたらしい。
「お、おい！大丈夫かよ!?」
　俺は買い物袋を放り出し、彼女の体を起こす。朝見た時よりも顔は赤くなっていて額に手を当てるとすごい高熱になっていた。
「すごい熱だ・・・・」
「おいおい・・・・これが普通の風邪かよ。」
　その異常さは来たばかりのマイティーにもわかるほどだった。息はしているが荒々しい。
「コイツは重症だな。早く港の診療所に見てもらった方が良さそうだぜ。」
「そうだな。」
　俺たちは、彼女の容態を見てもらうべく港の診療所へと向かうことにした。マイ

ティーには、とりあえず必要になりそうなものを持ってもらい、俺は高熱のロングクローを背負って行く。顔色を見る限りかなり悪化しているようだ。

「頼むよ、ロングクロー・・・・しっかりしてくれよ。」

俺は、不安になりながら返事をしない彼女を見ながら港を目指した。

港の診療所へと着くなり俺は、急いで先生に診察を頼んだ。先生がロングクローを見るなり、気難しい顔になり診察室へと運んで行った。部屋のすぐ隣の席に座っていた俺たち二人の下へ騒ぎを聞いたのか、レイが店の恰好のまま駆けつけてきた。
「ロングクローが倒れたって本当!?」
レイは、沈黙している俺たち二人を見ながら心配そうに聞く。
「あぁ。ソニックの話を聞く限り、ここ数日あまり体調がよくなかったそうだ。先生たちの様子を見る限り、風邪ではなさそうだな。」
マイティーは、気落ちしている俺に代わって話をする。俺は、すぐ傍にいながら彼女の体調の異変に気づけずにいたことを後悔していた。
(なんでもっと早く気づけなかったんだ・・・そんなに悪い病気だったらすぐにでも連れてきていたのに・・・・・)
しばらくすると、先生が部屋から出てくる。相変わらず気難しい顔だ。
「先生!ロングクローは!?」
俺は、藁にも縋る想いで先生に聞くが先生は重苦しそうに答えた。
「・・・・かなり、危険な状態だ。」

「!?」
「先生、一体どういうことなんだよ?」
　愕然としている俺に対してマイティーは、先生の顔を見ながら聞く。
「・・・・新型の悪性ウィルスだ。このウィルスは最近発見されたばかりでまだ治療法が確立していないんだ。彼女も大分弱っているから果たして後何日持つやら・・・・・・」
「ふざけるな!!」
　話を信じられず、俺は先生の襟を掴んだ。
「うおっ!?」
「ソニック!!」
「ロングクローが・・・・ロングクローが死ぬって言うのかよ!?こういうのを何とかするのが医者の仕事なんだろ?何とかしてくれよ!!」
　俺が先生を揺さぶりながら叫んでいると二人が取り押さえにかかった。
「やめろ、ソニック!」
「こんなことしたって、どうにもならないよ!」
　二人は俺を先生から離すが俺は、もがきながらも叫び続ける。
「何とかしてくれよ!頼むから・・・・助けてくれよ!!おい!」
「・・・・・・・・」

「何とか言ってくれぇぇぇぇ!!」

夕方。

診療所から二人に締め出された後、俺はトボトボと誰もいない家に戻って来た。
「・・・・・・ただいま。」
俺は反射的に声を出して、玄関を開ける。いつもなら心配しているロングクローが待ち構えているが今は夜が迫っていることもあって真っ暗だった。
「・・・・・・・・・」
俺は、鍵を閉め自分の部屋に戻ろうと階段を上り始める。その途中でロングクローの部屋が空いていることに気づく。
「・・・・・そう言えば、あの後すぐに飛び出して行っちまったからそのままにしちゃってたな。」
部屋のドアを閉めようと駆け寄るとふと部屋の中の彼女の机に目がいった。机の上には俺が入った時にはなかった何かが置いてあった。
「なんだ?」
俺は、明かりをつけて部屋の中に入っていく。そこには倒れる直前まで彼女が作業をしていたと思われる痕跡が残っており、机の上に乗っているものを見て俺はあっと声を出してしまった。
「これは・・・・・・」
そこには赤いシューズが置いてあった。二足ともちゃんと仕上がっている状態で、す

ぐ傍には、『Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ＳＯＮＩＣ』というメッセージカードがあった。

「俺の誕生日・・・・・・・準備しててくれたんだ。」

俺は、靴を持ちながら複雑になる。

近頃、少しでも大人になったところを見せたいと思うあまり彼女と話す機会が減っていた。誕生日のことに関しても別に何もしなくていいって意地張って言っちゃったんだよな。それなのに・・・・・・・

「・・・・・」

彼女の部屋のボードを見るとそこには、ガキの頃からの俺の写真がたくさん張ってある。あまり、見たことはなかったけど一つ一つちゃんと笑っている。

「・・・・・そう言えば、俺。一度も言ったことなかったな。」

靴を抱きしめながら誰もいない部屋で俺は、思わず独り言を言う。

「・・・・・・・・母さん。」

そう言えば、前世の母さんの記憶はあんまりなかったな。

俺が小学生の頃に親父と離婚してそれっきり。

こっちの世界での本当の母さんなんて見たこともない。

だから・・・・ロングクローは俺にとってたった一人の母さんだった。初めて、俺の

ことを見てくれたたった一人の。
「・・・・・嫌だ・・・・・こんなの嫌だよ・・・・・」
ガキの頃すら泣いたことがなかった俺は、思わず膝を付いてその場で泣き出してしまった。
「まだ、何もしていないのに・・・・・育ててくれたお礼もしていないのに・・・・・こんな別れ方・・・・したくねえよ!俺を置いて逝かないでくれよ!!」
泣きながら叫んでいるとしまっていたカオスエメラルドが落ちた。エメラルドは光源もないにもかかわらず温かみのある光を発していた。
「逝かないでよ・・・・・母さん・・・・・・・・・・!」
目の前で光っているエメラルドを見て、俺の頭の中で朝言っていたレイの言葉が過る。
『このサウスアイランドには、実は大昔の文明が残した宝石や遺跡の宝庫であって、その中に全ての生物にエネルギーを与えるだけじゃなくて、６つ全部集めるとどんな願いでも叶える奇跡の宝石があるんだって。』
更にこのエメラルドを手にしていた時のエッグマンの言葉。
『後、４つあれば・・・・・』
二つの言葉が交わり、俺はこの宝石が伝説通りに願いをかなえてくれるのではないか

と結論を導き出した。

「これを後５つ揃えれば・・・・・もしかして！」

俺は、まだ希望があると思い立ち上がる。

翌朝。

「お～い～!ソニック～!」

昨日のことを心配してか、マイティーは包みを持ちながら家の前に来ていた。

「腹減っているだろうからって、レイの店から貰ってきたぞ～お前の大好物～。」

しかし、何度も声をかけてもソニックの返事はない。

「お～い～、速く出てこないと俺が食っちまうぞ～。いいのか～。」

マイティーは、何度も声をかける。

ソニックが家にいないことを気づかずに。

EGGMAN

「えっ!?ソニックがいなくなった!?」
　レイは、慌てて戻って来たマイティーの報告を聞いて危うく注文品を落としそうになる。マイティーは、他の客に聞こえない声で話を続ける。
「朝飯の差し入れに家に行ったとき何度声をかけても返事がなかったから気になってピッキングして入ってみたんだよ。そしたらさ・・・・・・」
「マイティー、それは泥棒がやることだよ。」
「細かいところ気にすんなよ。それで中を調べてみたんだがソニックの姿がどこにもなかったんだ。他に何か手掛かりがないか調べてみたんだが、全然わからなかった。」
　人の家に忍び込んだことは置いといてマイティーは話す。
「そっか・・・朝、診療所へロングクローの容態について聞いてきたけどまだ意識が戻らないって聞いたからてっきり来ると思っていたんだけど。」
「ソニックの奴、何処へ行っちまいやがったんだ。こんな時だからこそ、傍にいるのが大事だって時に・・・・」

「おい、何なんだありゃ!?」

二人が会話をしている最中、外が急に騒がしくなった。

「なんだ?こんな昼間に。」

二人は客と共に外に出てみると空に巨大なモニターを取り付けた小型飛行船が飛んでいた。よく見ると飛行船には奇妙な顔のマークがついている。

「なんだ!?あのでっかい奴は!?」

「なにかの新しい宣伝かな?」

住民と共に眺めていた二人だったがモニターが起動するとそこにエッグマンの姿が映された。

『ホ～ホッホッホッホッホッホ!!島の人間どもよ、よく聞くがいい!!』

「あっ!アイツは昨日ソニックを襲った卵ヘッド!?」

彼の姿を見て驚くマイティーだったがエッグマンは演説をするかのように話を続ける。

『ワシの名はＤｒ．エッグマン!この島は愚かいずれは世界を全て支配者となる人間じゃ!その手始めとしてこの島を諸君らが気付かぬうちに我が支配拠点とさせても

らった！』
「「なんだって!?」」
「「知らない内のそんなことが!?」」
　エッグマンの言葉に住人たちは動揺する。自分たちが住んでいた土地がいつの間にかこの卵に手足が生えたような男の要塞となっていたのだ。驚くのも無理はない。
『既に我が秘密基地「スクラップブレイン」から着々とワシが作ったロボットたちがこの島を改造しておる。手痛い目に遭いたくなければ数日の猶予を与えている間にこの島から立ち去るがいい。』
「「「ふざけんな!!」」」
「勝手に島を改造しといてなに言ってんだ!!」
「お前の方が帰れ！」
「「「帰れ！帰れ!!」」」
　突然の立ち退きの言葉に住人たちはモニターに向かって物を投げ始める。
『あ～もう、うるさい奴らじゃなぁ。』
　向こうから様子が見れているのかエッグマンは困ったような顔をしながら言う。
『じゃが、逃げるのも今のうちじゃぞ?もうすぐその港の近くまでワシのロボット軍団が迫って来ておるはずじゃからな！では、早速グリーンヒルの方から見ちゃおうかな。』

グリーンヒルまで既に勢力圏を広げているということを聞いて住人たちは態度を一変させて顔を真っ青にしてしまう。エッグマンは意気揚々とモニターを切り替える。
『見るがいい！これが今のグリーンヒ、ありゃ!?』
しかし、モニターを切り替えた直後の映像を見て逆にエッグマンが呆気にとられた。
映されている場所はグリーンヒルで間違いないのだがどういうわけか自分のロボット軍団は全滅しており、何かを格納していたと思われるカプセルは綺麗に破壊されていた。
『ば、馬鹿な!?昨日の段階で既に進行していたはずなのに・・・・ん!?』
エッグマンは何かの連絡を受けたのかしばらく黙り込む。そして、しばらく経って通信が終わったのかと思いきや、モニター越しでこっちを見て
『え～～本日の『我がエッグマン帝国　開幕セレモニー』はちょっとしたトラブルで一旦中断させていただきます。後に行う予定の開幕セレモニーはこの事態が終息付き次第再開しようと思います。ではでは。』
それだけ言ってしまうとモニターは元のエッグマンの顔を模したマークへと戻り、急いで帰るかのように飛び去って行ってしまった。
「何だったんだ今の？」
「さあ？」

「なあ、あの話本当なら今のうちに荷造りして逃げた方がいいのかな?」
「そんなことしたって間に合うかよ。」
　住人が島を出て行くかこのまま残るかを争っている中、マイティーとレイは顔を合わせながらキョトンとする。
「あの卵ヘッド・・・・一体何がしたかったんだ?」
「でも、あの様子だと少なくとも誰かが妨害をし始めたというのは確かだよ。」
「誰かって、誰だよ!?この島でそんなことできる奴なんているわけが・・・・・・」
　マイティーは、言いかけた直後ソニックが朝からいなかったことを思い出す。
「「もしかしてソニックが!?」」

ＭＡＲＢＬＥ　ＺＯＮＥ

このサウスアイランドは、島の人口が少ないこともあって未だに解けていない謎が多く残されている。その中でこの遺跡地帯は、太古に繁栄していたと思われる文明が残した地下神殿が残っているゾーンでその神殿の中で眠っている財宝を守るために未だに仕掛けや罠が機能していると言われている。

そんな遺跡のすぐ傍でグリーンヒルを通り抜けてきたソニックの姿があった。

「・・・・・エメラルドが光っている。きっと２つ目はここにあるんだ。」

カオスエメラルドを見ながらソニックはそのことを確信すると、ボロボロになってしまった靴を脱ぎ捨て、ロングクローが作ってくれた赤いシューズへと履き替える。
「サイズもピッタシだ。これならそう簡単に履き潰れる心配もないな。」
足踏みをしながら履き心地を確認するとソニックは遺跡地帯を見ながら進み始める。
「カオスエメラルドを揃えて願いをかなえれば、ロングクローは助かるはずだ。待っててくれよ、ロングクロー。絶対に・・・・・助けて見せるからな。」
ソニックは遺跡の中へと消えて行った。

MARBLE ZONE

地下遺跡の中に乗り込んだソニックは、燃え上がる溶岩にゾッとしながらも少しでも早くカオスエメラルドを手に入れるべく、走り続けた。
「ここって本当に遺跡なのかよ。所々罠だらけじゃないか！」
特殊な金属でできていると思われるブロックで溶岩の海を渡りながらソニックは持っているエメラルドの反応を確認する。遺跡に入る前よりも光は確実に強くなってきている。この道で間違いはないようだ。
「おっと!?」
今度は天井から降ろされるトゲ付きのトラップを見て急いで離れる。罠がゆっくり上に戻るとそこには見事にハチの巣になったエッグマンのロボットの無残な姿が。
「うわぁ・・・・危なかった。グリーンヒルでも見たがやっぱりこのエメラルドを手に入れるために奴も必死のようだな。」
発見済みだったグリーンヒルでは既に捜索活動を打ち切ってロボット軍団を配置して要塞化を始めていた。ここはまだ要塞化されている様子はないため、おそらくエッグマンはまだここにあるエメラルドを発見していないと分かる。

「しかし、この遺跡は一体どこまで続いているんだ？流石に一つか二つ・・・・・」
ようやく広い通路に出たことで安心したのかソニックは、辺りを見回しながら歩き始める。だが、その直後に床の隠しボタンを押してしまった。
「あっ。」
その瞬間、通路全体がゴゴゴッと物音がし始め、ゆっくりと後ろを見ると溶岩が自分に向かって迫って来ていた。
「やべぇ!?」
ソニックは、急いで通路を走り抜ける。

ソニックが遺跡に乗り込んでからしばらく経った後、Ｄｒ．エッグマンも遺跡の方へ到着していた。

「あのハリネズミめ！まさか、グリーンヒルの部隊が全滅してしまうとは。」

エッグマンは、既にソニックたちの住んでいるグリーンヒル方面を除いてほぼ制圧している状態にあった。しかし、彼がこの島を占拠しようとするのには別の目的がある。

それは、このサウスアイランドに伝わる６つ存在すると言われている『超物質』だった。

自分の理想郷である『エッグマンランド』を建設するためにエッグマンは、世界征服のためにいくつもの兵器を開発し続けていた。だが、どれもパワー不足で自分の満足するような出来ではなかった。新エネルギーの開発の思うように進まない中、自分が読み漁っていた古代文献の１ページが彼に転機を与えた。

それは常に動き続けている島に眠るとされている6つの奇跡の宝石の存在で、その宝石にはとてつもない超パワーが秘められていると言う代物だ。これを呼んだエッグマンは、半信半疑に感じながらも秘かにサウスアイランドへ向かい、臨時拠点を構えた後に本格的な調査を開始する。すると島には6つの超エネルギー反応があること、更に島に住む小動物を自分のロボットの動力源として組み込んだところ、今までにない性能を発揮すると言ったこれまでの常識を覆す結果を出した。

更に基地の建造中にその一つが発見されたことで彼はこの超物資の伝承が本物であると確信、世界征服用の兵器の動力源にするべく奇跡の宝石『カオスエメラルド』の捜索を開始した。そして、つい先日グリーンヒルにて二つ目を発見し、自分の計画が一歩進んだと思った矢先、邪魔をしに来たのがソニックなのである。

「ここにはかなりの数のロボットたちを送り込んだが今だに発見されておらん。あのハリネズミにカオスエメラルドを取られてはたまったものではないわ。」

エッグマンは、愚痴を零しながら自作の探知レーダーでカオスエメラルドの探索を開始する。ソニックが自分の計画を邪魔しに来たのは、まだ不明だが彼は既に自分が発見したカオスエメラルドを一つ持っている。取り返すならまだしも彼もまたエメラルドを探しているとしたら厄介になる。

「地下の宮殿の方には多くの調査ロボットたちを送ったが発見には至らなかった。なら

ば、地上の部分に隠されておるはずじゃ。」
エッグモービルを操縦しながら、彼は地上から噴き出す溶岩の上を横切っていく。しばらく、進と地上に出てきたソニックの姿が見えた。
「あれはソニック!?奴め、まさかあの罠だらけの地下宮殿を潜り抜けてきたというのか!?」
彼の手には自分が取り損ねたカオスエメラルドが握られている。
「あの様子じゃとまだエメラルドは手に入れてないようじゃな。まあ、奪われた分を取り返すには絶好の機会じゃわい!」
エッグマンは邪悪な笑みを浮かべるとエッグモービルの装備を火炎弾にしてソニックの真上へと放った。
「うわっ!?」
突然降ってきた火炎弾をソニックは慌てて避ける。火炎弾はソニックが立っていた場所から燃え広がる。
「お前はエッグマン!?」
「ホーホッホッホッホッホッ!また、会ったなソニック!グリーンヒルの部隊を壊滅させただけでなく、この古代遺跡を突破するとは。じゃが、調子に乗るのもここまでじゃ!貴様の持っているカオスエメラルド、返してもらうぞ!」

エッグマンは、そう言うと火炎弾をソニックに向けて発射する。ソニックはそれを回避するとスピンアタックでエッグモービルを攻撃する。
「誰が返すかよ！それにこれは元々この島のものだろ！返すのはお前の方だ!!」
「何よぉ!?この生意気なハリネズミめが!!」
二人の攻防は、ボゴボゴと煮えたぎっている溶岩の上で展開される。ソニックは数少ない足場からエッグモービルを攻撃し、対するエッグマンは火炎弾でソニックの足場を奪って溶岩の中へ突き落そうとする。
両者ともに隙の無い戦いを繰り広げるがソニックのスピンアタックを一定以上受け続けたエッグモービルは、火炎弾を撃ち出す前に爆発。戦闘続行が困難になった。
「ええい！前よりも耐久性上げたというのに!!」
エッグマンは、黒焦げになりながら悔しがりその場を後にしていく。ソニックはエッグマンが引き上げるのを見ると疲れた体に無理を利かせてカオスエメラルド探しを再開する。
「この近くのはずだ・・・・・」
ソニックは、カオスエメラルドの光を頼りに一番反応が強い所を手で掘り始める。しばらく掘り続けると地面が光り始め、丁寧に土を掃う別の色のカオスエメラルドが出てきた。

「これで二つだ!!」
ソニックは、持っていたカオスエメラルドと揃えて共鳴するかのように光るのを見て本物だと確信する。
がっ、その瞬間今まで溜まっていた疲労が一気に出たのかそのままぐったりと倒れてしまった。
「あと４つ・・・・・とりあえず、一旦休もう。」
夜明け前に家を出てから碌に休んでいなかった。
カオスエメラルドを無くさないようにソニックは物陰に隠れてしばらくの間眠りについた。

ラビリンス溺死事件?

遺跡地帯での戦いが終わった翌日。
マイティーとレイは、グリーンヒルにてソニックを探していた。
「お～い～、レイ!ソニックは見つかったか!?」
地上から彼の足取りを探しているマイティーは、上空を滑空しているレイに向かって叫びながら聞く。当のレイも上空から目を細めてソニックを探していたがどこを見渡しても見つからなかった。レイはゆっくりと下降し、地面に着地した。
「ダメだよ、何処を探しても見つからないよ。」
「アイツ、もしかして島の奥まで入っちまったんじゃねえのか?人間じゃ危ないっていう理由で大人ですらは行かねえのによ・・・・」
マイティーは、グリーンヒルの先に見える島の中で最も最高峰の山を見る。おそらく、ソニックはそちらのほうへ向かって行ったのだろう。だとすれば、自分たちもさらに先を行かねばなるまい。
「こいつは面倒なことになっちまいそうだな・・・・ソニックの奴、無茶しやがって。」
「ロングクローも危ないのに。早く連れ戻さなくちゃ。」

二人はさらに足を進める。ちょうどグリーンヒルの終わりのところにたどり着くとそこにはソニックが捨てたボロシューズが落ちていた。二人は、これを見てソニックがこの先へ行ったのを確信する。

「待ってろよ、ソニック。」

ＳＰＲＩＮＧ　ＹＡＲＤ　ＺＯＮＥ　ＡＣＴ３

「ぬわぁああ〜〜!?」

エッグマンはボロボロの姿でエッグモービルごと落下していた。その後ろではソニックが追いかけている。

「待てエッグマン！逃がさねぇぞ!!」

スプリングヤードに到着したソニックは、カオスエメラルドを見つけたのと同時にエッグマンと遭遇し、交戦した。エッグマンは、エッグモービルの下部から棘を出してソニックを串刺しにしようとするが床のブロックに突き刺さってしまい、仕方なくブロックを破壊して破片をぶつけようとするがあっさりとやられてしまった。

「ええい！やむを得ん！こうなったら地下のラビリンスで撒くしかない！」

エッグマンは自ら開けた穴から入り込み、地下へと姿を消す。ソニックも追いかけてそのまま穴の中へと落ちて行った。

ＬＡＢＹＲＩＮＴＨ　ＺＯＮＥ

「うげぇ・・・・・」

俺は、エッグマンの追って地下の迷宮に入り込んだことをひどく後悔する。

原因は目の前に広がる辺り一面の水だ。

「マジでかよぉ・・・・・なんでよりによってここら一帯が水で沈んでいるんだよ～!!」

本来のソニックならどうなのかは知らんが俺は、どういうわけかカナヅチだった。前世では得意ではないとはいえそこそこ泳げたはずなのだがソニックとして生きるようになってから練習をしてもうまくならない。すぐに沈んでロングクロ―に引き上げてもらうことが当たり前だった。

「くっそ・・・・」

俺は、飛行しながら先へと逃げていくエッグマンを睨む。幸い、奴は俺が泳げないことに気づいていないようだ。でも、このまま追いかけなかったら確実にバレる。仕方なく水面ギリギリのところでジャンプをし、足場を移動しながら追いかけていく。

途中にまたメカが飛び出してきたからスピンアタックで対処。毎回思うけど・・・中に入っている動物たち、俺の攻撃喰らってよく無傷でいるな。

エッグマンの後を必死に追っていく俺だが、アイツ・・・・・・登れなさそうな高い壁を越えていきやがった。

「・・・・・・・・」

俺は、周囲に登れそうな場所を探してみるが見当たらない。っということはもう腹を括って水に入るしかない。

「・・・大蛇とか住み着いていないよな。」

恐る恐る水に飛び込む。

・・・・うぅ、う、動きづらい。
これだから、水の中は嫌いなんだ。

『ゴボ、ゴボ、ゴボボォ・・・・』

俺は、腕を動かしながら水中の迷路を進んでいく。幸い、迷路のところどころに浸水を逃れて空気がある空洞があるから溺れずには済んでいる。しかし、問題なのは、迷宮のあちこちにあるトラップだ。コイツだけは壊しようがないからうまく抜けていくしかない。これで時間をロスして危うく溺死するかもしれないと思うほど息が苦しくなった。

そして、今。

水がない陸地は遠く、俺は息が持たず、今にも溺れてしまいそうになっていた。

『ゴボゴボゴボゴボ!!』

口と鼻から泡が勢いよく出てくる。呼吸をしたくても周りは水。両腕を動かしながらなんとか移動をしようともがき続けるが意識が遠くなってきた。

『ゴボ・・・ゴボ・・・・』

俺は、とうとう腕を動かす力もなくなりそのまま水中でぐったりとする。

このまま死んじまうのかな。

いや、一応主人公なんだし・・・・・・でも、主人公の死因が溺死って。

（ロングクロ―のことも助けられずに死ぬのか・・・・せめて、親孝行すべきだったな・・・・！）

俺は、朦朧としている意識の中で少し離れたところに光っている何かを見つける。
（なんだろう？もしかしてカオスエメラルドか？）
苦しい中、俺は手を伸ばして光るものを取ろうとする。もう限界ということもあって幻覚を見ているのかもしれない。でも、1％でも助かる可能性があるのなら後悔しないようにしたい。
俺は、懸命に手を伸ばして光る物体を手に取るとやはりカオスエメラルドだった。
（やっぱり・・・・・でも、もう駄目だ・・・・）
同時に力尽きかけたがエメラルドをとると同時に俺と同じぐらいの大きさと思われる泡が出現した。
（!?）
一瞬、何が起こったのかわからなかったが俺は、思い切って泡を吸い込む。すると肺に新しい酸素が補給され、一気に朦朧と仕掛けていた意識が戻ってきた。
（た、助かった！）
俺は、目の前をよく見直すと大理石でできたレンガの割れ目から空気の玉が出てきていることに気づく。人間だったらアウトだったところだが今の俺にはこの割れ目から出てくる空気の玉がある意味酸素ボンベの代わりになっているらしい。
念のため、もう一度空気の玉を吸いなおすと俺は急いで出基地を探しに泳いでいっ

た。

「おのれ、ソニックめ。」

一方、ＬＡＢＹＲＩＮＴＨの陸地ではエッグマンがエッグモービルを修理していた。いくら頑丈にできているエッグモービルとはいえ、連続でダメージを受けた上に無理して逃げてきたこともあり、エンジントラブルを起こしてしまったのだ。

エッグマンは、いつソニックが追い付いてくるのかとビビりながらも急いで修理を進める。

「幸い、このラビリンスは迷路のようにできておる。いくらあのハリネズミとはいえ、早々ここまで来れまい。運が良ければ溺れているかもしれんな。そうすれば後はエメラルドを回収するだけでワシのエッグマンランドの計画は楽に達成できる！・・・・・・あっ、でもそうだとしたら今度はワシがアイツを探さなければならんのか・・・・・泳ぐの疲れるんだよな～これが。」

独り言を言いながら彼は、修理を進めているとすぐ後ろの水場からブクブクと泡が出てきた。

「ん、なんじゃ？複雑すぎてメカはそんなに多く放っておらんはずじゃが・・・・」

彼は、不思議そうに水面を覗こうとする。すると水面からソニックが顔を出してきた。

「プハッ!!」

「そ、ソニック!?」

まさか、もうここに来ると思っておらずエッグマンは飛び上がって驚く。ソニックは、口から水を吐き出して周囲を見ると目の前で彼が驚いているのに気づく。
「ケホケホォ・・・・よぉ、エッグマン。こんなところで休憩とは随分余裕だな。」
「忌々しいハリネズミめ!まさか、あの迷宮を生きて出てくるとは・・・・くうぅ!!おかげで楽をして貴様からカオスエメラルドを取り返せると思ったのに!!」
焦っていることを悟られぬように言うエッグマンは、慌ててエッグモービルの乗り込む。ソニックは、手足を動かしながら臨戦態勢に入る。
「さてと・・・水中では満足に動けなかったからな。ここいらで決着を付けよう・・・・・」
「帰ろう〜!!」
「あっ!?」
戦うかと思いきやエッグマンは、そのまま逃げて行ってしまった。
「また、逃げる気か!」
「逃げるわけではないわ!貴様のおかげでマシンが不調だから仕方なく基地に帰るだけじゃ!直ったらまた相手をしてやるからそれまで待っておれ!!」
そう言うと彼は、そのまま飛び去って行ってしまった。ソニックは、そのまま壁を昇って行き、一番高いところまで登ると外の景色が目に映った。
「やれやれ・・・・やっとお日様とご対面か。」

疲れたとばかりに尻餅をつくと彼は、目の前の夕日を眺める。
「エメラルドはこれで４つ・・・・はあ、腹減ったなぁ～。」
早くしないと日が沈んでしまう。ソニックは、疲れた体に無理を聞かせながら今夜や住む場所を探して歩き始めた。